The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	RCIの改訂と妥当性についての検討 : RCIで測定される関係の親密さとは?
Author(s)	谷口, 淳一
Citation	対人社会心理学研究. 2004, 4, p. 57-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

RCI の改訂と妥当性についての検討
－RCI で測定される関係の親密さとは？－

谷口　淳一(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、RCI (Relationship Closeness Inventory) の改訂を行い、異性関係において、RCI が測定している関係の“親密さ”について検討した。その結果、1)携帯電話やメールといった新しい接触ツールに関する項目を加える必要性、2)異性友人関係よりも恋人関係において RCI を構成する行動特性の評定値が高くなること、3)RCI で測定される関係の親密さが主観的親密感とは異なること、が示された。

キーワード: RCI、異性関係、関係の親密さ、主観的親密感、メール

問題

われわれが健康な生活を送る上で、特定の誰かと親密な関わりをもち、親密な関係を形成、維持していくことは非常に重要である。たとえば、ストレスを感じたときには親友を求め、その親友に自分の悩みや苦しみを打ち明けることでそのストレスから開放されることをわれわれはよく知っている。

これまで親密な関係に関する研究は、社会心理学、家族心理学、人格心理学、発達心理学、臨床心理学など様々な分野で研究が行われてきており、多くの知見が蓄積されてきた。そのどれもが親密な関係をもつことの重要性、必要性、われわれに与える影響の強さを示すものである。しかし、そもそも“親密さ”とは何なのか、“親密な関係”とは何なのか。Prager(2000)は“親密さ”の定義は親密さの研究者の数とほぼ同じほど存在すると述べており、どの研究も親密な関係の重要性を述べているものの、親密さの定義に関しては研究者に委ねられていることを示唆している。“親密さ”の定義が曖昧であるため、“親密さ”に関する研究において“親密さ”をどのように測るのかに関しても研究者間に明確な同意はない。多くの研究では、“親密さ”の定義を被験者に委ねるという測定法を使用している。たとえば、「あなたはあなたの恋人とどれくらい親密ですか？」というような質問項目を設定し、それに対する回答によって被験者がどの程度親密であるかを決定する。そもそも“親密さ”の定義に関する共通理解がないため、被験者は自らの主観的な親密さの定義に基づいて、“親密さ”の量を報告する。“親密さ”に関して当事者が観察者と同等の判断ができるという仮定に基づいており、また、“親密である”という用語への個人特有の意味づけに頼っており、非合理的な方法であるといえる(Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989)。そのため、このような方法で測定される“親密さ”は“主観的親密感”と呼ぶべきものである。

Berscheid et al.(1989)は、Kelly, Berscheid, Christensen, Harvey, Huston, Levinger, McClintock, Peplau, & Peterson(1983)の概念を用いて親密さの測定を試みている。Kelly et al.(1983)は二者関係における相互依存性に注目し、相互依存性の高い関係が親密な関係であると考えている。そして相互依存性の程度は4つの行動特性によって表されるとしている。それは、(1)お互いに影響を与え合う頻度、(2)影響の強さ、(3)影響を与え合う活動の多様性、(4)頻度が多く、影響が強く、多様な活動を行っている期間の長さ、である。Berscheid et al.(1989)は、これらの行動特性のそれぞれを測定する尺度である RCI(Relationship Closeness Inventory)を作成している。まず、頻度として「二人きりで一緒に過ごす時間」の実際量を尋ね、多様性としては「二人きりで一緒に行う活動領域の数(行動の多様性)」を行動リストにチェックさせることで求めた。また、影響の強さとしては「お互いの日常的な行動、決定、計画、目標に影響を与える程度」を測定するために多様な生活領域のリストのそれぞれについて相手から受ける影響の程度を評価させている。そして、頻度、多様性、影響の強さの3つの行動特性のそれぞれを 10 段階に得点化し、それらを単純加算した得点を関係の親密さの得点(RCI 得点)としている[1]。Berscheid et al.(1989)は、RCI 得点の信頼性(内的信頼性、再検査信頼性)、妥当性(識別的妥当性、構成概念妥当性、予測的妥当性)について検討しており、RCI 得点が充分な信頼性と妥当性を有していることを報告している。主な結果についてみると、RCI 得点には性差は見られないが、関係の種類による差が見られており、友達関係や家族関係に比べて恋人関係において得点が高くなっている。また、関係期間と RCI 得点との間には小さな負の相関が見られたが、関係の種類別の検討では、友

人関係のみに負の相関が見られ、恋人関係や家族関係では有意な相関は見られていない。さらに、RCI 得点と"主観的親密感"との関連を検討したところ、恋愛関係においてのみ有意な正の相関が見られ、家族関係や友達関係では有意な相関は見られていない。また、RCI 得点および"主観的親密感"と関係に対してのポジティブな感情の程度との関連を検討したところ、RCI 得点と感情との間の相関係数よりも、"主観的親密感"と感情との間の相関係数の方が有意に高くなっていた。Berscheid et al.(1989)はこの結果より、RCI 得点が他の親密さを測る指標と異なるのは、RCI 得点が比較的に感情的成分を含まないことであると考察している。

本邦では、大坊(1992)や久保(1991, 1993)が Berscheid et al.(1989)の RCI に関して検討を行っている。大坊(1992)は、RCI の日本語版を作成し、項目の改訂を行い、RCI を構成する各行動特性について、性別と対象者要因(関係の種類)との関連を検討している。その結果、恋人関係は友人関係よりも会う頻度は少ないが、電話による会話回数や一日の接触総時間は長いことや、排他的デート相手との方がそうではないデート相手(複数)とよりも接触機会が多く、接触時間が長いことなどを示している。久保(1993)も、RCI の項目についていくつかの改訂を行い、RCI の下位項目について主成分分析を行っている。その結果、恋人関係、友人関係ともに複数の主成分が得られ、親密な関係は単一次元の量的側面だけでとらえる(Berscheid et al.[1989]の単純加算によって親密さを求める方法も含む)よりも、複数の主成分による多次元上において評価されるべきものであることを示している。久保(1993)は主成分分析で得られた主成分得点と RCI 得点(Berscheid et al.[1993]と同様の方法で頻度、多様性、強さの得点を単純加算した得点)との相関関係についても検討している。その結果から久保(1993)は、RCI は、「つきあい始めてからの期間が比較的短く、日頃、頻繁に会う機会があり、そして、日々の生活の中で幅広い関わりをもっているような関係の親密さを測定する上では妥当性をもつ尺度」(p. 9)であり、「つきあい始めてからの期間が長く、現在ではあまり会う機会がないが、会うと長時間屈託なく過ごせるような関係の親密さを評価するための尺度としては妥当性がない」(p. 9)としている。また久保(1993)は、RCI 得点と"主観的親密感"との関連についても検討しており、友人関係、恋人関係ともに有意な正の相関関係が得られるが、友人関係に比べ恋人関係において相関係数が高くなっていることから、単純加算による RCI 得点は友人関係よりも恋人関係の親密さの測定において妥当性をもつと推測している。そして、それは恋人関係の方が友人関係よりも、「現在進行」の親密な関係である場合が多いからであるとしている。しかし、この久保の解釈には疑問が残る。なぜなら、久保(1993)は RCI 得点が関係の親密さを反映しているのかの妥当性の基準として"主観的親密感"を設定しているからである。Berscheid et al.(1989)は、"主観的親密感"では測れない親密さの成分を測定しようと RCI を作成している。そのため、恋人関係において友人関係よりも、RCI 得点と主観的親密感の相関係数が高くても、RCI 得点は友人関係よりも恋人関係の親密さの測定において妥当性を有しているとはいえないだろう。つまり、友人関係においては、RCI 得点が"主観的親密感"との間の相関係数が高くなくても、"主観的親密感"以外の関係の親密さを測定する尺度との相関係数は高くなっているならば、RCI 得点が友人関係の親密さを測定する尺度として妥当性を有していないとは言い切れない。また、恋人関係においても、RCI 得点が"主観的親密感"と相関関係を有しているだけでなく、"主観的親密感"以外の関係の親密さを測定する尺度と相関関係を有しており、かつ"主観的親密感"による影響を統制しても、相関関係が維持されていないと、RCI は関係の親密さを測定する尺度として、"主観的親密感"との識別的妥当性を有していないことになる。そこで本研究では、恋人関係および友人関係において、RCI で測定される RCI 得点が、"主観的親密感"以外の関係の親密さを測定する尺度との相関関係について、"主観的親密感"との相関関係と同時に検討する。"主観的親密感"以外の関係の親密さを測定する尺度としては、関係満足感や関係関与感などから構成される関係への評価を測定する項目を使用する。RCI が"主観的親密感"では測定しきれていない、関係の親密さを測定できるならば、RCI と関係への評価との相関関係は、"主観的親密感"による影響を統制しても、維持されるはずである。さらに本研究では、RCI の下位項目から単純加算によって求められる RCI 得点だけについて検討するだけでなく、久保(1993)と同様に RCI の下位項目について主成分分析を施し、複数の主成分を求めて、関係評価との関連などの検討を行う。RCI を用いて測定される関係の相互依存性には複数のパターンが存在すると考えられるからである。

本研究では、使用する RCI の下位項目についても、Berscheid et al.(1989)や久保(1993)の使用した尺度についていくつかの改訂を行い、使用する。ひとつは、接触頻度を尋ねる項目に、携帯電話やメールを介した接触の項目を設けることである。これは、ここ数年の携帯電話やメールの普及を考慮に入れるためである。

また本研究では、「最も親しい異性」との親密な関係のみを取り上げる。Berschid et al.(1989)や久保(1993)は、恋人関係の他に友人関係を取り上げているが、友人関係については、それが同性との友人関係なのか、異性と

の友人関係なのかについては区別せずにデータを収集し、議論を行っている。しかし、同性との友人関係と異性との友人関係は、関係の“親密さ”という意味でも、色合いはかなり異なるといえる。恋人関係と友人関係の比較を行っても、その相違は異性関係と同性関係の相違であるのか、恋人関係とそれ以外の異性関係の相違であるのかは不明確である。そこで本研究では、異性関係に対象を絞ることで、恋人関係とそれ以外の異性関係との、RCIで測定される関係の親密さの相違について検討を行う。

方法

調査対象者

関西圏および北海道、宮崎にある 7 つの大学の学生を対象に、講義時に一斉に実施した。回答者は 758 名(男性 328 名、女性 428 名、性別不明 2 名)。平均年齢は男性 19.48 歳(SD=1.55)、女性 19.49 歳(SD=1.39)。

質問項目

(1)行動特性の測定 まず「現在、あなたの恋人や好きな人、もしくは家族以外で最も親しい異性」を1人想定させ、その異性が「恋人」、「BF・GF」、「片思い」、「親友」、「友人」、「その他」のいずれにあたるかを選択させた。以下、それぞれの項目について想定させた異性との関係や関わりについて回答を求めた。行動特性の測定について本研究では、久保(1993)の使用した尺度に一部、修正、追加を行ったものを用いた。

接触頻度と接触時間について久保(1993)では、週単位で会う頻度と電話の頻度、一回あたりに過ごす時間と一回あたりの通話時間を回答させている。本研究では、昨今の携帯電話、メールの普及を考慮し、電話とは別に携帯電話で話す頻度(日単位)と一回あたりの通話時間、週単位のメール(携帯メールを含むことを明記)の送信数と受信数についても回答を求めた。

多様性については久保(1993)と同様に行動の多様性と話題の多様性を尋ねた。行動の多様性には久保(1993)の項目に独自にいくつかの項目を追加した 28 項目を用い(Table 1 参照)、話題の多様性には久保(1993)の 14 項目を使用し、最近 1 ヶ月の間に、想定した異性との間で行ったことのある行動、および話したことのある話題にすべて○印をつけるよう求めた。

Table 1 行動の多様性の指標として用いた項目

1 遊園地・動物園に行く	2 映画をみる	3 テレビをみる
4 カフェ(喫茶店)に行く	5 食事をする	6 飲みに行く
7 泊りがけの旅行に行く	8 ドライブをする	9 音楽を聴く
10 インターネットをする	11 アルバイトをする	12 ビデオをみる
13 教会やお寺へ行く	14 コンサートに行く	15 勉強する
16 ゲームセンターに行く	17 カラオケに行く	18 雑談
19 本・雑誌・漫画を読む	20 ショッピング	21 散歩をする
22 スポーツ観戦に行く	23 サークル活動	24 競馬に行く
25 テレビゲームをする	26 自分かその人の親と食事をする	
27 スポーツ(ビリヤード・ボーリングを含む)をする		
28 野外活動・アウトドア(キャンプ・ハイキング・ピクニック・つり・登山)		

注)下線は、久保(1993)に追加、修正した項目

関係の強さとしては久保(1993)と同様に友人との関係が回答者の生活、および考え方に与える影響の強さの2項目を「非常に影響を受けている」から「全く影響を受けていない」までの7件法で尋ねた。

関係の長さとしては異性と知り合ってからの期間を尋ねた。また、「恋人」を想定した回答者には、その恋人と交際を始めてからの期間についても尋ねた。

(2)関係への評価の測定 想定した異性との関係をどのように評価しているかについて、中村(1991)などを参考にして作成した6項目(「関係に満足しているか」、「その人はあなたの要求を満たしてくれているか」、「関係に深く関わっているか」、「関係が持続してほしいか」、「関係を重要視しているか」、「関係に依存しているか」)に7件法で回答を求めた。

(3)想定した異性の関係への評価についての認知の測定 関係をどのように評価しているかについての本人の認知と同様に、親密な関係にある相手が自分たちの関係についてどのような評価をしているかについての認知も、親密さの指標として適切であると考えられたため、親密さの指標として測定することとした。関係への評価の測定に用いた6項目を用いて、想定した異性が関係をどのように評価していると思うかを7件法で尋ねた(「その人はあなたとの関係にどの程度満足していると思いますか」など)。

(4)主観的親密感、恋愛感情の測定 想定した異性との主観的親密感についての1項目(「どの程度親しいか」)に7件法で回答を求めた。また、想定した異性に対する恋愛感情、想定した異性が回答者に抱いている恋愛感情の推測についても7件法で回答を求めた。

なお、使用した質問紙には、自己呈示動機や精神的健康の程度を尋ねる尺度(GHQ28)なども含まれていたが、本研究の目的とは関連しないため、ここでは報告しないこととする[2)]。

結果

関係の種類の分類

想定した異性と回答者との関係の種類について、回答者の自己報告による関係の定義と、想定した異性に対する恋愛感情の高さ、および想定した異性が回答者に抱いていると思われる恋愛感情の高さに基づいて分類を行った。想定した異性との関係を「恋人」と選択していた回答者は「恋人」群(N=241、男性=87、女性=154)とし、「恋人」以外の関係ラベルを選択していた回答者を「異性友人」(N=509、男性=239、女性=270)群とした。さらに、「異性友人」群の回答者について、想定した異性に対す

る恋愛感情の高さと、想定した異性が回答者に抱いていると思われる恋愛感情の高さに応じて(それぞれの7件法による測定において5以上を「恋愛感情あり」、4以下を「恋愛感情なし」とした)、4群に分類した。自分も想定した異性も両方とも「恋愛感情なし」であるとした回答者を「友達」群(N=231、男性=110、女性=121)、自分は想定した異性に対して「恋愛感情あり」であるが想定した異性は自分に対して「恋愛感情なし」であるとした回答者を「片思い」群(N=195、男性=91、女性=104)、自分も想定した異性も両方とも「恋愛感情あり」であるとした回答者を「両思い」群(N=65、男性=29、女性=36)、自分は想定した異性に対して「恋愛感情なし」であるが想定した異性は自分に対して「恋愛感情あり」であるとした回答者を「相手片思い」群(N=18、男性=9、女性=9)とした。このうち、「両思い」群、「相手片思い」群の回答者数は他の群に比べて比較的少なくなっていたため、関係の種類の比較には用いないこととした。

関係の長さ、種類、性別による行動特性の相違

関係の長さ、関係の種類、性別によって行動特性に違いが見られるかを検討した。まず、関係の長さについて回答者を各群の回答者数が均等になるように3群に分けた。関係の長さが0～10ヶ月の回答者を短期群(271名)、11～22ヶ月の回答者を中期群(197名)、23ヶ月以上の回答者を長期群(280名)とした。また、関係の種類としては、「恋人」群、「片思い」群、「友達」群の3群を取り上げた。各行動特性を従属変数、関係の長さ(3)、関係の種類(3)、性別(2)を要因とする3要因分散分析を行った。ただし、生活に与える影響と考え方に与える影響以外の行動特性については値の分布を是正するためにそれぞれ平方根変換を行い分析に使用した。各群のの行動指標の平均値についてはTable 2に示した。

会う回数、電話回数、携帯電話回数、メール送信数、受信数、また、1回あたりに過ごす時間、通話時間、携帯通話時間のすべての接触回数、接触時間で関係の種類の有意な主効果が得られた(それぞれ $F(2, 629)=155.48$; $F(2, 626)=67.62$; $F(2, 625)=110.89$; $F(2, 633)=114.439$;

Table 2 関係の長さ、種類、性別の行動指標の平均値

		恋人関係			片思い関係			友達関係		
		短期	中期	長期	短期	中期	長期	短期	中期	長期
会う回数	男性	2.88	3.77	2.56	0.85	1.67	0.42	0.91	0.88	0.75
(回/週)	女性	2.85	3.60	2.27	0.95	0.57	0.23	1.20	0.84	0.29
過ごす時間	男性	355.36	369.00	388.88	65.51	86.25	49.82	67.03	86.64	60.65
(分/回)	女性	439.43	479.09	428.89	87.70	64.55	103.33	152.78	60.00	121.44
電話回数	男性	1.40	1.67	2.84	0.66	0.72	0.04	0.30	0.58	0.37
(回/週)	女性	3.05	1.19	2.39	0.14	0.15	0.22	0.21	0.21	0.20
通話時間	男性	9.43	20.88	22.88	8.33	11.94	11.25	12.11	19.79	8.20
(分/回)	女性	35.35	19.60	22.13	3.10	7.75	21.67	6.11	2.56	11.60
携帯電話回数	男性	2.00	2.04	1.13	0.55	0.56	0.29	0.34	0.59	0.89
(回/日)	女性	1.86	1.40	1.56	0.27	0.05	0.28	0.32	0.24	0.21
携帯通話時間	男性	20.63	16.61	26.92	9.12	21.83	5.86	7.73	7.96	6.63
(分/回)	女性	25.18	16.71	14.50	10.70	7.58	20.00	15.50	9.97	19.20
メール送信数	男性	75.10	29.92	23.28	17.94	3.28	5.30	6.97	5.64	4.09
(回/週)	女性	45.55	30.09	30.38	9.31	3.71	3.11	11.86	2.65	3.13
メール受信数	男性	86.07	32.63	53.00	17.75	3.56	4.63	8.38	5.78	3.99
(回/週)	女性	45.70	28.16	28.99	9.41	3.98	3.07	11.40	2.79	2.89
行動の多様性	男性	9.40	10.09	8.52	2.63	2.84	1.50	1.44	2.72	2.06
(0-28)	女性	8.80	10.29	8.52	3.43	2.59	1.86	2.81	2.27	1.68
話題の多様性	男性	8.07	8.06	6.40	3.70	3.84	2.29	2.75	3.16	2.61
(0-14)	女性	7.71	8.16	7.02	3.88	3.23	3.14	4.05	3.11	2.75
生活に与える	男性	5.77	5.91	5.72	4.35	4.95	4.57	3.03	3.04	3.22
影響(1-7)	女性	5.78	6.22	5.93	5.47	5.14	4.71	3.52	3.19	3.40
考え方に与える	男性	4.70	4.56	4.88	4.19	4.68	4.50	2.47	3.12	3.51
影響(1-7)	女性	5.24	5.09	5.26	4.92	4.76	4.64	3.48	3.62	3.97

$F(2, 632)=109.89$; $F(2, 620)=232.90$; $F(2, 624)=19.37$; $F(2, 625)=23.09$; すべて $p<.001$)。多重比較(Tukey 法によるHSD検定、以下すべてTukey法)を行った結果、恋人関係において、片思い関係、友達関係よりもすべて接触回数が多く、接触時間が長くなっていた。また、会う回数、携帯電話回数、メール受信数、1回あたりに過ごす時間において性別の有意な主効果が見られた(それぞれ $F(1, 629)=4.85$; $F(1, 625)=5.89$; $F(1, 632)=5.69$; $F(1, 620)=5.58$; すべて $p<.05$)。男性は女性よりも会う回数、携帯電話回数、メール受信数は多いものの、1 回あたりに過ごす時間は短くなっていた。会う回数、メール送信数、受信数において関係の長さの有意な主効果が見られた(それぞれ $F(2, 629)=17.12$; $F(2, 633)=9.33$; $F(2, 632)=8.52$; すべて $p<.001$)。多重比較を行った結果、中期群、短期群、長期群の順に会う回数が多くなっており、短期群は中期群、長期群よりもメール送信数、受信数が多くなっていた。ただし、会う回数については性別×関係の長さの交互作用が有意になっており($F(2, 629)=3.34$, $p<.05$)、単純主効果検定と多重比較を行った結果、男性では中期群が長期群、短期群よりも会う回数が多くなっているが、女性では短期群と中期群が長期群よりも会う回数が多くなっていた。電話回数においては関係の種類×関係の長さの交互作用が有意になっていた($F(4, 626)=3.05$, $p<.05$)。単純主効果検定の結果、恋人関係のみで関係の長さの影響が見られ、長期群が中期群よりも電話回数が多くなっていた。さらに1回あたりの携帯通話時間において関係の種類×性別×関係の長さの交互作用が有意になっていた($F(4, 625)=2.47$, $p<.05$)。単純主効果と単純交互作用の検定の結果、片思い関係の男性において関係の長さの影響が見られ、中期群が長期群よりも1回あたりの携帯通話時間が長くなっていた。

行動の多様性、話題の多様性については、関係の種類の主効果が有意であり(それぞれ $F(2, 638)=298.27$; $F(2, 638)=142.15$; ともに $p<.001$)、多重比較を行った結果、恋人関係が片思い関係、友達関係よりも多様な行動や会話を行っていた。また、関係の長さの主効果も有意であり(それぞれ $F(2, 638)=10.54$; $F(2, 638)=8.83$; ともに $p<.001$)、長期群が短期群、中期群よりも行動の多様性も話題の多様性も低くなっていた。

生活に与える影響、考え方に与える影響については、関係の種類の主効果が有意であり(それぞれ $F(2, 637)=191.12$; $F(2, 637)=53.09$; ともに $p<.001$)、多重比較を行った結果、恋人関係、片思い関係、友達関係の順に与える影響が強くなっていた。また、性別の主効果も有意であり(それぞれ $F(1, 637)=8.93$; $F(1, 637)=14.93$; ともに $p<.001$)、女性が男性よりも関係から強い影響を受けていることが示された。

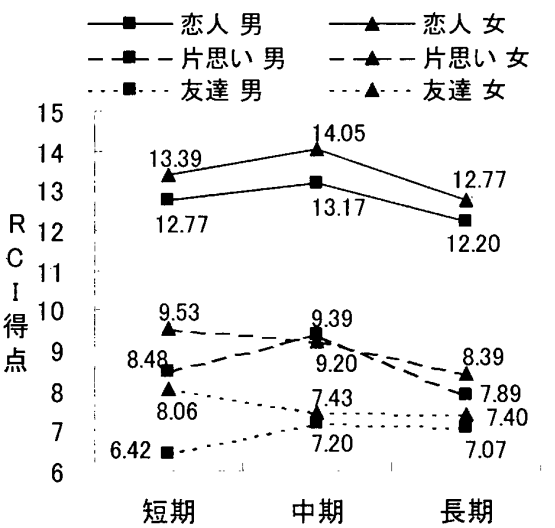

Figure 1 関係の長さ、種類、性別の RCI 得点の平均値

RCI 得点の算出

久保(1993)にならい、Berscheid et al.(1989)の算出方法にしたがい、週単位の総時間、多様性、関係の強さの得点を単純加算したものを RCI 得点とした。また、週単位の総時間は久保(1993)と同様に、週単位で会う頻度(回)と1回あたりに過ごす時間(分)とを掛け合わせたものを週単位に二人で過ごした総時間とし、7段階尺度に変換した(Table 3 参照)ものを使用した。

RCI 得点に関して関係の長さ(3)、関係の種類(3)、性別(2)を要因とする3要因分散分析を行ったところ、関係の長さ($F(2, 617)=4.95$, $p<.01$)、関係の種類($F(2, 617)=355.97$, $p<.001$)、性別($F(1, 617)=11.31$, $p<.001$)の有意な主効果が得られた。多重比較の結果、中期群と短期群が長期群よりも、また男性よりも女性において RCI 得点が高くなっていた。さらに、恋人関係、片思い関係、友達関係の順に RCI 得点は高くなっていた(Figure 1)。

行動特性の尺度化と各行動特性間の相関関係

久保(1993)、谷口・大坊(2002)と同様の手続きで、生活に与える影響、考え方に与える影響の2項目を除いた行動特性 11 項目を、7段階尺度に変換した。メールの受信数については、メールの送信数との相関が非常に高かった($r=.96$)ことから、これ以後はメールの送信数のみを扱うこととした。7段階尺度と raw data との対応については Table 3 に示した。次に久保(1993)と同様に行動の多様性と話題の多様性の和を2で除したものを多様性の指標として、生活に与える影響と考え方に与える影響の和を2で除したものを関係の強さの指標とした。以上より求めた行動特性 11 項目(恋人関係以外は 10 項目)(関係の長さ、交際期間、会う頻度、過ごす時間、通話頻度、通話時間、携帯電話通話頻度、携帯電話通話時間、メール送信数、多様性、関係の強さ)についてそれぞれとの相関

Table 3 変換後の各尺度値に対する raw data の領域

尺度値	関係の長さ(月)	交際期間(月)	会う回数(回/週)	過ごす時間(分/回)	電話回数(回/週)	通話時間(分/回)
1	0-2.0	0-0.7	0-0.14	0-24.4	0-0.14	0-1.6
2	2.1-8.1	0.8-2.8	0.15-0.57	24.5-97.9	0.15-0.57	1.7-6.6
3	8.2-18.2	2.9-6.5	0.58-1.28	98.0-220.4	0.58-1.28	6.7-15.0
4	18.3-32.4	6.6-11.5	1.29-2.28	220.5-391.8	1.29-2.28	15.1-26.6
5	32.5-50.6	11.6-18.0	2.29-3.57	391.9-612.2	2.29-3.57	26.7-41.6
6	50.7-73.0	18.1-26.0	3.58-5.14	612.3-881.6	3.58-5.14	41.7-60.0
7	73.1-	26.1-	5.15-7.00	881.7-1200	5.15-7.00	60.1-

尺度値	携帯回数(回/日)	携帯時間(分/回)	メール送信(回/週)	行動多様性	話題多様性	週単位の総時間(分)
1	0-0.05	0-1.6	0-1.3	0	0	0-171.4
2	0.06-0.22	1.7-6.6	1.4-5.5	1-2	1	171.5-685.7
3	0.23-0.50	6.7-15.0	5.6-12.5	3-5	2	685.8-1542.8
4	0.51-0.88	15.1-26.6	12.6-22.2	6-9	3-4	1542.9-2742.8
5	0.89-1.38	26.7-41.6	22.3-34.7	10-14	5-7	2742.9-4285.7
6	1.39-2.00	41.7-60.0	34.8-50.0	15-20	8-10	4285.8-6171.4
7	2.01-	60.1-	50.1-	21-28	11-14	6171.5-8400

関係を検討した。分析に際しては性別を統制した偏相関分析を行った。また、恋人関係と異性友人関係(片思い関係, 友達関係を含む)とでは相互作用形態が大きく異なることが予想されたため、恋人関係と異性友人関係ごとにそれぞれ分析を行った。

恋人関係では、行動特性間に有意な相関関係はあまり見られなかった(Table 4)。関係の長さは会う回数、多様性と有意な負の相関、電話回数と正の相関を示しており、交際期間はメール送信数と有意な負の相関、電話回数と正の相関を示していた。また、接触頻度、接触時間内の相関をみると、電話回数と通話時間、携帯電話回数と携帯通話時間とがそれぞれ有意な正の相関を示しており、電話回数と携帯電話回数との間にも正の相関が見られた。また、会う回数と携帯通話時間の間には有意な負の相関が見られた。さらに、会う回数は多様性と関係の強さと有意な正の相関関係にあり、携帯電話回数と多様性の間にも有意な正の相関関係が見られた。多様性と関係の強さの間にも有意な正の相関が見られた。

異性友人関係では、行動特性間に有意な相関関係が多く見られた(Table 5)。関係の長さは会う回数、メール送

Table 4 恋人関係における行動特性間の偏相関関係(性別を統制)

	関係の長さ	交際期間	会う回数	過ごす時間	電話回数	通話時間	携帯回数	携帯時間	メール送信数	多様性
交際期間	.74 ***									
会う回数	-.18 **	-.07								
過ごす時間	.06	.11	-.09							
電話回数	.14 *	.19 **	.03	.08						
通話時間	.02	.08	-.08	-.01	.58 ***					
携帯回数	-.12 †	-.02	.09	.04	.19 **	-.01				
携帯時間	-.06	-.03	-.26 ***	.05	.01	.11 †	.23 ***			
メール送信数	-.11 †	-.17 **	-.04	-.11	-.10	.04	.08	.05		
多様性	-.17 **	-.07	.38 ***	.12 †	.12 †	.13 †	.23 ***	.01	-.05	
関係の強さ	.02	-.01	.16 *	-.01	.08	.11 †	.06	-.06	.13 †	.31 ***

注: †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 5 異性友人関係における行動特性間の偏相関関係(性別を統制)

	関係の長さ	会う回数	過ごす時間	電話回数	通話時間	携帯回数	携帯時間	メール送信数	多様性
会う回数	-.23 ***								
過ごす時間	.01	.25 ***							
電話回数	-.03	.27 ***	.18 ***						
通話時間	.10 *	.12 *	.27 ***	.60 ***					
携帯回数	-.02	.42 ***	.26 ***	.40 ***	.32 ***				
携帯時間	.07	.15 ***	.42 ***	.26 ***	.38 ***	.42 ***			
メール送信数	-.16 ***	.30 ***	.22 ***	.18 ***	.18 ***	.35 ***	.28 ***		
多様性	-.16 ***	.40 ***	.46 ***	.29 ***	.28 ***	.31 ***	.37 ***	.42 ***	
関係の強さ	-.04	.09 †	.21 ***	.10 *	.13 **	.16 ***	.19 ***	.26 ***	.31 ***

注: †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

信数、多様性と有意な負の相関関係にあった。接触頻度、接触時間内の相関をみると、会う回数、過ごす時間、電話回数、通話時間、携帯電話回数、携帯通話時間、それぞれの間にすべて有意な正の相関が見られた。さらに、多様性は会う回数、過ごす時間、電話回数、通話時間、携帯電話回数、携帯通話時間、メール送信数との間に有意な正の相関が見られ、関係の強さは過ごす時間、電話回数、通話時間、携帯電話回数、携帯通話時間、メール送信数との間に有意な正の相関が見られた。多様性と関係の強さとの間にも有意な正の相関が見られた。

親密さの成分

久保(1993)と同様に関係の親密さの成分を調べる目的で、行動特性 11 項目(異性友人関係は 10 項目)について主成分分析を行った。久保(1993)において関係の種類によって異なる主成分が得られているため、恋人関係と異性友人関係ごとにそれぞれ分析を行った。各条件とも、固有値 1.0 以上の主成分を選択した。

恋人関係では、5つの成分が得られた(Table 6)。第1主成分は、関係の長さ、交際期間に正の高い負荷を示していた。この成分は、知り合ってからの期間、交際を始めてからの期間が長いような関係性を示す成分と考えられ、「長期間」成分と命名した。第2主成分は、通話頻度、通話時間、携帯電話通話頻度、多様性、関係の強さに正の高い負荷を示しており、電話による接触を頻繁に行っており、多様な話題について会話しており、相手からの影響も強いような恋人関係と考えられ、「電話・多様・影響大」成分と命名した。第3主成分は、携帯電話通話時間、通話時間に正の高い負荷を示し、会う頻度に負の高い負荷を示しており、会う機会が少ないが、電話や携帯電話で長電話をするような恋人関係を示す成分と考えられ、「直接接触少・長電話」成分と命名した。第4成分は、過ごす時間、携帯電話通話頻度、携帯電話通話時間に正の高い負荷を示し、通話時間に負の高い負荷を示しており、一度会うと多くの時間を一緒に過ごし、携帯電話で連絡を取って長電話をするような関係性を示す成分と考えられ、「長時間接触・携帯電話」成分と命名した。第5成分は、メール送信数、関係の強さ、関係の長さに正の高い負荷を示しており、メールで連絡を取ることが多く、相手から強い影響を受けており、知り合ってからの期間も比較的長いような関係を示す成分と考えられ、「メール・影響大」成分と命名した。

異性友人関係(片思い関係、友達関係を含む)では、3つの主成分が得られた(Table 7)。第1主成分は、会う頻度、過ごす時間、通話頻度、通話時間、携帯通話頻度、携帯通話時間、メール送信数、多様性に正の高い負荷を示しており、直接会うことも、電話や携帯電話で話す機会もメールのやり取りも多く、一緒に過ごす時間も話す時間も長く、幅広く活動したり会話したりしているような関係性を示す成分と考えられ、「接触多」成分と命名した。第2主成分は、関係の長さ、通話頻度、通話時間に正の高い負荷を示し、会う頻度に負の高い負荷を示しており、知り合ってからの期間が長く、会うことは少ないが、電話で頻繁に話しており、長電話をしている関係性を示す成分と考えられ、「長期間・電話・直接接触少」成分と命名した。第3成分は、過ごす時間、関係の強さ、関係の長さに正の高い負荷を示し、会う頻度、通話頻度には負の高い負荷を示しており、相手から受ける影響が強く、一度会うと多くの時間を一緒に過ごすが、直接会ったり、電話で会話をする機会は少ないような関係性を示す成分であり、「影響大・長時間接触・接触頻度少」成分と命名した。

RCI 得点、親密さの成分、主観的親密感、関係への評価、相手からの関係への評価の認知の関連

RCI 得点および親密さの成分と、主観的親密感、関係への評価の関連を検討した。まず、関係への評価の変数を得るために6項目の評定値を合計して「関係評価」の合成得点とした(α=.875)。また、想定した異性の関係への評価についての認知についても6項目の評定値を合計して「相手からの評価の認知」の合成得点とした(α

Table 6 恋人関係の主成分表

	長期間	電話・多様・影響大	直接接触少・長電話	長時間接触・携帯	メール・影響大
関係の長さ	.589	-.077	-.199	.056	.309
交際期間	.585	.026	-.209	.153	.239
会う回数	-.257	.274	-.503	.013	-.029
過ごす時間	.139	.110	.021	.514	-.248
電話回数	.292	.489	.176	-.227	-.229
通話時間	.215	.436	.300	-.440	-.179
携帯回数	-.109	.317	.229	.447	.254
携帯時間	.009	.046	.585	.340	.155
メール送信数	-.202	-.015	.228	-.269	.643
多様性	-.191	.500	-.221	.249	.014
関係の強さ	-.069	.353	-.217	-.122	.445
固有値	2.012	1.852	1.444	1.185	1.081

Table 7 異性友人関係の主成分表

	接触多	長期間・電話・直接接触少	影響大・長時間接触・接触頻度
関係の長さ	-.065	.589	.311
会う回数	.306	-.345	-.349
過ごす時間	.327	.005	.386
電話回数	.335	.325	-.419
通話時間	.330	.475	-.176
携帯回数	.371	.053	-.258
携帯時間	.356	.204	.278
メール送信数	.322	-.294	.043
多様性	.397	-.224	.188
関係の強さ	.217	-.149	.495
固有値	3.301	1.358	1.174

Table 8　RCI 得点、主成分得点、関係評価、主観的親密感の相関関係

	関係評価	相手からの評価の認知	RCI得点	主観的親密感
恋人関係				
RCI得点	.52 ***	.42 ***		.43 ***
長期間	-.14 *	-.08	-.26 ***	-.04
電話・多様・影響大	.38 ***	.32 ***	.66 ***	.32 ***
直接接触少・長電話	-.25 ***	-.12 †	-.49 ***	-.19 **
長時間接触・携帯	-.07	-.04	.24 ***	.04
メール・影響大	.25 ***	.32 ***	.12 †	.22 ***
主観的親密感	.64 ***	.58 ***		
異性友人関係				
RCI得点	.59 ***	.52 ***		.54 ***
接触多	.52 ***	.55 ***	.73 ***	.58 ***
長期間・電話・直接接触少	-.13 **	-.06	-.29 ***	-.04
影響大・長時間接触・接触頻度少	.27 ***	.21 ***	.40 ***	.23 ***
主観的親密感	.73 ***	.75 ***	.54 ***	

注：†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

=.909)。次に RCI 得点および親密さの各主成分得点と主観的親密感、関係評価、相手からの評価の認知との関連を性別を統制した偏相関分析を用いて、恋人関係、異性友人関係それぞれについて検討した(Table 8)。

恋人関係では、RCI 得点は、主観的親密感、関係評価、相手からの評価の認知のどれとの間にも有意な正の相関を示していた。親密さの成分をみると、第2主成分「電話・多様・影響大」、第5主成分「メール・影響大」は、主観的親密感、関係評価、相手からの評価の認知のどれとの間にも有意な正の相関を示していた。これに対して、第3主成分「直接接触少・長電話」は、主観的親密感、関係評価との間に有意な負の相関を示していた。また、第1主成分「長期間」は、関係評価との間に有意な負の相関を示していた。

異性友人関係では、RCI 得点は恋人関係と同様に、主観的親密感、関係評価、相手からの評価の認知のどれとの間にも有意な正の相関を示していた。親密さの成分をみると、第1主成分「接触多」、第3主成分「影響大・長時間接触・接触頻度少」は、主観的親密感、関係評価、相手からの評価の認知のどれとの間にも有意な正の相関を示していたが、相関係数は、第1主成分の方が第3主成分よりも高くなっていた。また、第2主成分「長期間・電話・直接接触少」は、関係評価と有意な負の相関を示していた。

主観的親密感を統制した場合の RCI 得点、親密さの成分と関係への評価、相手からの関係への評価の認知の関連

RCI 得点や親密さの成分が、関係への評価、相手からの関係への評価に対して主観的親密感とは独立した効果を有しているかを検討するために、RCI 得点、親密さの成分、それぞれを説明変数、関係への評価、相手からの関係への評価を目的変数とした重回帰分析を行った。主観的親密感が関係への評価、相手からの関係への評価に与える効果を統制するために主観的親密感を説明変数に加え、また性差の影響を統制するために性別も説明変数に加えた。

Table 9　RCI 得点を説明変数とした重回帰分析

	恋人関係		異性友人関係	
	関係評価	相手からの評価の認知	関係評価	相手からの評価の認知
RCI得点	.30 ***	.21 ***	.27 ***	.16 ***
主観的親密感	.52 ***	.49 ***	.58 ***	.67 ***
性別	-.07	-.13 *	.02	-.06 †
R^2	.48 ***	.37 ***	.58 ***	.59 ***

注：†p<.10, *p<.05, ***p<.001

Table 10 恋人関係において親密さの成分を説明変数とした重回帰分析

	関係評価	相手からの評価の認知
長期間	-.12 *	-.06
電話・多様・影響大	.22 ***	.17 **
直接接触少・長電話	-.15 **	-.03
長時間接触・携帯	-.09 †	-.06
メール・影響大	.14 **	.21 ***
主観的親密感	.51 ***	.47 ***
性別	-.05	-.11 *
R^2	.51 ***	.41 ***

注：*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 11 異性友人関係において親密さの成分を説明変数とした重回帰分析

	関係評価	相手からの評価の認知
接触多	.18 ***	.19 ***
長期間・電話・直接接触少	-.10 ***	-.04
影響大・長時間接触・接触頻度少	.14 ***	.07 *
主観的親密感	.58 ***	.63 ***
性別	.03	-.05
R^2	.58 ***	.59 ***

注：*p<.05, ***p<.001

RCI 得点を説明変数とした重回帰分析では、恋人関係でも異性友人関係でも、主観的親密感を統制しても RCI 得点から関係への評価、相手からの関係への評価への有意な効果が見られた(Table 9)。また、親密さの成分を説明変数とした重回帰分析においては、関係への評価、相手からの関係への評価と有意な相関関係にあった成分は、主観的親密感を統制しても有意な効果を有していた(Table 10、Table11)。

考察

行動特性の検討

各行動特性について、関係の長さ、関係の種類、性別

を要因とする分散分析を行った結果、関係の長さ、関係の種類、性別によって行動特性の評定値が異なることが示された。

関係の種類については、すべての接触ツール(直接接触、電話、携帯電話、メール)で、恋人関係が片思い関係や友人関係よりも、接触回数、接触時間ともに多くなっていた。また、多様性(行動の多様性、話題の多様性)、関係の強さ(生活に与える影響、考え方に与える影響)についても、恋人関係が片思い関係や友人関係よりも高くなっていた。Berscheid et al.(1989)、久保(1993)はともに、接触回数、多様性、関係の強さにおいて、恋人関係が友人関係よりも値が高くなることを示している。異性関係のみを扱った本研究の結果は、恋人関係がそれ以外の異性関係よりも有意に行動特性の値が高くなることを示している。Berschid et al.(1989)や久保(1993)の結果とあわせて考えると、「関係の親密さを行動特性から考えた場合、恋人関係が最も「親密な」関係である」(久保, 1993、p.8)とより強くいえるだろう。また、携帯電話やメールといった新しい接触ツールにおいても、恋人関係は他の関係よりも接触回数や接触時間の値が高くなることが示された。片思い関係と友達関係とでは、行動特性の値に大きな相違は見られなかったが、関係の強さ(生活に与える影響、考え方に与える影響)においては、片思い関係は友達関係よりも値が高くなっており、片思い関係と友達関係は関係の強さによって識別できるといえる。

関係の長さについては、中期群、短期群、長期群の順に会う回数が多くなっており、短期群で中、長期群よりもメール送受信数が多くなっていた。また、恋人関係の長期群は中期群よりも電話の回数が多いことも示された。さらに、長期群は短、中期群よりも多様性の値が低くなっていた。異性と知り合ったばかりの頃はメールで頻繁に連絡をとるが、知り合ってからある程度の時間が経過すれば、会う回数はしだいに増えるが、メールのやり取りは少なくなる。さらに時間が経過すれば、会う回数が減少し、電話での接触が増えるといえる。Berschieid et al.(1989)は、関係の長さと接触回数との有意な相関は恋人関係は得ておらず、本研究はこれとは異なる結果となっているが、Berschieid et al.(1989)は接触のツールとして直接接触しか扱っていない。接触ツールとして電話やメールを含めて考えれば、関係の長さに応じて接触頻度が変化するというよりも、使用する接触ツールが変化することが示唆される。

性別については、男性は女性よりも、会う回数、携帯電話回数、メール受信数が多くなっていた。Berscheid et al.(1989)、久保(1993)ともに接触頻度において性差は見られていない。Berscheid et al.(1989)は、カップル間での接触頻度の評定値の関連を検討したところ、相関係数がさほど高くないことを報告している。つまり、実際に会う回数とそれに対する評定値とが異なるという測定上の誤差が生じている可能性がある。本研究でも同様の誤差が生じており、性差が生じた可能性もある。ただ、この可能性については推測の域を出ず、性差に関しては今後、詳細に検討する必要がある。また、女性は男性よりも関係から強い影響を受けていると報告しており、この結果は、久保(1993)と一致する。

RCI 得点については、関係の長さ長期群が中期群や短期群よりも得点が低くなっており、男性よりも女性において得点が高く、恋人関係、片思い関係、友達関係の順に高くなっていた。これは、関係の長さについては接触頻度と多様性、性差については関係の強さにおける各群の相違を反映しているといえる。また、片思い関係と友達関係の得点差は、関係の強さの相違が影響していると考えられる。RCI 得点では、接触頻度として直接接触の頻度と接触時間のみを測定値に含めるため、電話やメールでの接触頻度や時間については考慮に入れていない。電話やメールを通じた接触頻度を測定値に含めれば、RCI 得点の様相も異なることになると考えられる。

行動特性間の関連と親密さの主成分

恋人関係においては、行動特性間の関連が全体的にあまり見られなかった。接触頻度においても接触ツール間の関連はかなり低くなっており、直接、電話、メールでの接触頻度に有意な相関関係は見られなかった。山近(2003)は、同性友人関係、異性友人関係、恋人関係において、対面での接触頻度、携帯電話を含む電話での通話頻度、e メールや携帯メールの送信数の関連を検討している。その結果、同性友人関係や異性友人関係では、接触頻度に関して、接触ツール間に関連が見られるものの、恋人関係では関連が見られないことを報告しており、本研究と一致した結果を得ている。頻繁に対面接触を行っている人と電話でもよく会話をする傾向があることから、電話は対面接触をする人とのコミュニケーション・メディアであるという見解(中村, 2000)や、利用可能なツールをすべて用いて接触頻度を確保するという意味で、常に接触を保つことを求める「フルタイム・インティメイト」(中島・姫野・吉井, 1999; 吉井, 1993)が携帯メールの利用者にも見られるという研究(山近・谷口・大坊, 2002)もあるが、これらは恋人関係には適用できないことが本研究の結果より示唆される。恋人関係の場合、あらゆるツールを用いてフルタイム・インティメイトを求めるというよりも、利用可能な接触ツールを限定的に用いて接触を行っているといえる。また、多様性は対面での接触頻度と中程度の有意な相関を有しており、携帯電話での接触頻度ともある程度の関連が見られたが、電話やメールでの接触頻度とは有意な関連が見られなかった。恋人関係において多

様な活動や会話を行うためには、直接会うことが必要であるといえる。関係の強さは、多様性と有意な関連が見られていたが、対面での接触頻度と弱い関連が見られたものの、電話やメールでの接触頻度とは有意な関連が見られなかった。電話やメールでの接触は、多様性に加え、関係の強さには直接影響しないことを示唆する結果であるといえる。恋人関係において、行動特性間の関連があまり見られなかったことを考察すると、恋人関係の多様性が示唆される。Berscheid et al.(1989)は、Kelly et al.(1983)が接触頻度、多様性、関係の強さが相対的に高い関係を親密な関係であるとしていることから、接触頻度、多様性、関係の強さの評定値を単純加算してRCI得点を算出して、関係の親密さを単一次元で測定しようとしている。しかし、本研究で示唆された恋人関係の多様性を考慮に入れるならば、単一次元で親密さを測定することは多くの情報を遺漏しており、関係に関する情報の一部分しか測定できていないことになるといえる。

異性友人関係では、行動特性間の関連は比較的に高くなっていた。接触頻度の接触ツール間の関連は高く、異性友人関係において接触頻度が高い関係とは、あらゆるツールを用いて接触する「フルタイム・インティメート」な関係といえる。また、多様性は各接触ツールの接触頻度と関連が高くなっていた。しかし、関係の強さはメール送信数とは有意な関連が見られたものの、対面での接触頻度とは有意な関連が見られなかった。この結果については慎重な検討が必要であるが、1つの可能性としては、異性友人関係の場合の対面での接触は、二人きりで会うことを目的として接触しているというよりも、大学やサークルで偶然に二人きりになったり、授業が目的で大学に来たついでに食事に出かけたなどが多いと考えられる。しかし、メールの場合は、相手を特定して接触を行っており、接触を目的としてメールを送信しているといえる。そのため、異性友人関係でメールの送信数が多い関係とは、関係から受ける影響も強いと考えられる。

久保(1993)と同様に、行動特性から関係の親密さの成分を求めるために主成分分析を行った結果、恋人関係では5つの主成分が得られた。行動特性間の相関分析で見られた接触ツール間の関連の弱さを反映して、各成分は特定の接触ツールに負荷が高くなっている。第2主成分は電話、第3主成分は対面での接触(ただし負の負荷)、第4主成分は携帯電話、第5主成分はメールでの接触頻度に高い負荷が見られる。久保(1993)で得られた成分と比較すれば [3]、接触頻度、多様性、関係の強さに正の負荷が見られる「現在進行成分」は、本研究の第2成分「電話・多様・影響大」に類似している。ただし、久保(1993)の現在進行成分では、対面と電話での接触を合算したものを接触頻度としているが、本研究では対面と電話での接触を区別して行動特性として扱うことで特に電話での接触頻度に負荷が高いことが異なる点である。

異性の友人関係における行動特性の主成分分析では、3つの主成分が得られた。恋人関係とは対照的に接触ツール間の関連の強さを反映して、第1主成分にどの接触ツールを用いた接触頻度も正の負荷を示していた。友人関係に関して久保(1993)で得られた主成分と比較すると、本研究の第1主成分は「現在進行成分」に類似しているといえる。また、第2主成分は久保(1993)の「安定成分」に類似しており、知り合ってからの期間が長く、直接に会うこともないような関係を示す成分であるが、興味深いのは、電話での接触頻度、接触時間が正の負荷を示していることである。「安定」段階に入った友人関係は、直接に会う代わりに、頻繁に電話で連絡をとることで関係の「安定」が維持されているのかもしれない。第3主成分も第2主成分と同様に久保(1993)の「安定成分」に類似している。ただし第3主成分は、対面に加え、電話での接触頻度も少ない。その代わりに一度会うと多くの時間を一緒に過ごし、関係から受ける影響が強くなっており、関係の「安定」が維持されていると予測される。各成分が示す関係についての考察を深めるために、片思い関係と友人関係の間で各主成分得点に相違があるかを検討した。その結果、第1主成分については片思い関係と友達関係の主成分得点の相違は有意傾向だったものの(片思い＞友達, $t(392)=1.76$, $p<.10$)、第2主成分については、友達関係の方が主成分が得点が有意に高く($t(392)=4.36$, $p<.001$)、第3主成分については、片思い関係の方が主成分得点が高くなっていた($t(392)=3.11$, $p<.01$)。つまり、第2主成分は、相手に対して恋愛感情を抱いていない友人関係を反映しており、第3主成分は相手に恋愛感情を抱いているが相手からは恋愛感情を抱かれていないと考えている片思い関係を反映しているといえる。

主観的親密感、関係への評価との関連

RCI 得点は恋人関係でも異性友人関係でも主観的親密感、関係への評価、相手からの評価の認知のどれとも有意な相関が見られた。Berschid *et al.*(1989)では友人関係においてRCI 得点と主観的親密感との間には有意な相関は見られず、久保(1993)では正の有意な相関が見られたものの相関係数の値はさほど高い値にはなっていなかった。しかし、異性友人関係を扱った本研究では、RCI 得点と主観的親密感との間の相関係数は恋人関係の値よりも同程度か、それ以上に高い値となっていた。つまり、恋人関係と同様に、異性友人関係におけるRCI 得点で測定される関係の“親密さ”は、主観的親密感として測定される関係の“親密さ”と共通する部分を多分に含んでいるといえる。しかし、RCI 得点と主観的親

密感が全く一致するものではないことは本研究より示唆された。恋人関係でも異性友人関係でも、主観的親密感を統制しても RCI 得点は関係への評価や相手からの評価の認知に対して有意な影響を有していた。つまり、RCI 得点は主観的親密感と共通する部分を多分に含むが、主観的親密感では測定しきれてない関係の親密さを測定している可能性が示唆された。

恋人関係における親密さの成分については、第2主成分「電話・多様・影響大」と第5主成分「メール・影響大」とが主観的親密感、関係への評価、相手からの評価の認知と有意な正の相関関係、第3主成分「直接接触少・長電話」とは有意な負の相関関係にあった。久保(1993)の「現在進行成分」と類似している「電話・多様・影響大」成分において主観的親密感や関係評価との関連が見られたのは、ある程度予測できることであるが、「メール・影響大」成分と「直接接触少・長電話」成分との有意な相関関係が見られたことは興味深い。これらの結果を総合して考えるならば、関係から受ける影響の強さが主観的親密感とも、関係評価とも関連しているといえる。接触頻度や多様性の評定とは異なり、関係の強さの評定は比較的に主観的である(Berscheid et al., 1989)ので、主観的親密感や関係評価と関連が強いという可能性が考えられる。また、関係評価との相関係数が有意となっていた親密さの成分は、主観的親密感の関係評価に対する影響を統制しても、関係評価への有意な影響は維持されたままだった。つまり、主観的親密感と有意な相関関係にあった親密さの成分は、主観的な報告によって測定される関係の強さの影響で関係評価とも有意な関連が見られるともいえるが、主観的親密感とは異なる関係の親密さを測定しているともいえる。

異性友人関係における親密さの成分については、第1主成分「接触多」と第3主成分「影響大・長時間接触・接触頻度少」とが主観的親密感、関係への評価、相手からの評価の認知と有意な正の相関関係が見られた。興味深いのは、「接触多」成分よりも「影響大・長時間接触・接触頻度少」成分において関係の強さの負荷が高いにもかかわらず、「接触多」成分の方が主観的親密感や関係評価との相関係数の値が高くなっていることである。異性友人関係の場合は、さまざまな接触ツールを用いて頻繁で多様な接触を行うことが、関係から受ける影響の強さに対する主観的な報告よりも、主観的親密感の認知や関係評価に関連しているといえる。また、異性友人関係においても、主観的親密感と有意な相関関係にあった親密さの成分は、主観的親密感の関係評価に対する影響を統制しても、関係評価への有意な影響は維持されたままであり、恋人関係と同様に主観的親密感とは異なる関係の親密さを測定しているといえる。

まとめと問題点

本研究では、RCI の改訂を行い、異性関係において、RCI が測定している関係の"親密さ"について検討した。RCI を構成する行動特性に携帯電話やメールといった昨今普及した接触ツールを新たに追加するという改訂を行ったが、特に恋人関係において各接触ツールの接触頻度間の相関が低く、行動特性を用いた主成分分析でも各接触ツールの接触頻度を反映した主成分が得られていた。これらの結果は、久保(1993)の主張と一致して、RCI を構成する行動特性から単純加算によって単一の測定値(RCI 得点)を出すだけではなく、行動特性から複数の主成分を求めて、親密さを多次元的に測定する尺度として使用することの有効性を示すものであると考えられる。そして、携帯電話やメールといった新たな接触ツールも項目に含めることも必要といえる。その意味では、RCI は新しい接触ツールの普及といった社会的な背景の変化に応じて常に改訂される必要があるだろう。本研究の調査以降、若者を中心に携帯メールが急速に普及したため、今後の研究では携帯メールのやり取りに関しても RCI の行動特性項目に含める必要がある。

また、本研究は異性関係のみを扱うことによって、恋人関係における行動特性の高い評定値が異性関係に起因するものではなく、恋人関係という特定的な関係によるものであることが示された。増田(1994)は恋愛関係の排他性についての議論の中で、恋愛集団の成立は恋愛関係にあることを 2 人の成員が協同的行為を通じて確認することによるとしている。これに従えば、相互依存の程度を関係の親密さとして測定する RCI において恋人関係の評定値が高くなることは妥当な結果であるといえる。また、恋人関係ではない異性関係である異性友人関係は RCI 得点が主観的親密感との関連が比較的強いという結果から同性友人関係とは異なる様相を示していた。異性友人関係を扱った研究は僅少であり(Werking, 1997)、異性友人関係の親密さについても明らかになっていない部分が多いが、本研究の結果を一助として異性友人関係の親密さについても検討することが望まれる。

RCI で測定される関係の親密さが主観的親密感とは異なるものであることは、親密さの一指標として測定した関係への評価に対して主観的親密感を統制しても有意な影響が見られたことから示された。ただし、主観的親密感と関係への評価との相関が比較的に高くなっていた。RCI が他の親密さを測る指標と異なるのは、比較的に感情的成分を含まない(Berscheid et al, 1989)ことを考慮に入れれば、関係への評価よりも感情的成分を含まないと思われる親密さの指標を今後取り上げる必要がある。RCI で測定される関係の親密さがどのようなものなのかについては、今後も多様な親密さの指標や、他の外的変

数との関連を求めて検討を続ける必要があるだろう。

引用文献

Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.

大坊郁夫 1992 親密な関係における行動特性の検討 日本グループ・ダイナミックス学会第 40 回大会発表論文集, 59-60.

Kelly, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J. H., Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Peplau, L. A., & Peterson, D. R. 1983 *Close Relationships*. New York: Freeman.

久保真人 1991 親密な関係とその行動特性 大阪教育大学紀要 第IV部門, 39, 265-270.

久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ－RCI の妥当性と限界－ 実験社会心理学研究, 33, 1-10.

増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, 34, 164-182.

中島一朗・姫野桂一・吉井博明 1999 移動電話の普及とその社会的意味 情報通信学会誌, 59, 79-92.

中村 功 2000 電話と人間関係 廣井脩・船津衛(編著) 情報通信と社会心理 (pp.45-70) 北樹出版

中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.

Prager, K. J. 2000 Intimacy in Personal Relationships. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close relationships: A Source book* (pp.229-242). Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc.

谷口淳一・大坊郁夫 2002 同性友人関係におけるパーソナリティの類似性認知が魅力判断に与える効果－パーソナリティ特性次元と対人魅力次元による検討－ 対人社会心理学研究, 2, 51-64.

谷口淳一・大坊郁夫 投稿中 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討

Werking, K. 1997 *We're just good friends*. The Guilford press. 1-11

山近良裕 2003 モバイル・コミュニケーションが対人関係に与える影響 平成15年度大阪大学大学院人間科学研究科修士論文(未公刊)

山近良裕・谷口淳一・大坊郁夫 2002 携帯メディアを介したコミュニケーションが孤独感に与える影響(1) 日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 834-835.

吉井博明 1993 電話利用の新しい形態と電話ネットワークの社会的意味 川浦康至(編) 現代のエスプリ 306 メディア・コミュニケーション(pp.62-74) 至文堂

註

1)Berscheid et al.(1989)は、関係期間に関してはRCI 得点に含めていない。Kelly et al.(1983)は、相互依存性の程度は単なる関係期間ではなく、相互作用の頻度や多様性、強さのすべてが高いレベルにあるときの期間によって表されていると述べている。Berscheid et al.(1989)は、このような相互依存性の程度が高い関係の長さ(duration)を特定することは困難であるため RCI 得点には含めず、単なる関係の長さ(longevity)についてはRCI 得点とは別に扱い、RCI 得点との関連を検討している。

2)RCI と自己呈示動機との関連については、谷口・大坊(投稿中)で詳しく報告している。

3)久保(1993)は男女別々に主成分を求めているが、本研究では男女を区別せずに主成分を求めている。

The revision of the RCI and the examination of its validity:

what is the "relationship closeness" measured by the RCI ?

Junichi TANIGUCHI (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This study revised the Relationship Closeness Inventory (RCI) and examined the "relationship closeness" measured by the RCI in the opposite-sex relationships. Main findings were as follows: (1) the RCI should include items on communication tools such as cell-phones and e-mails, (2) the behavioral index of the RCI were higher in romantic relationships than opposite-sex friendships, (3) the "relationship closeness" measured by the RCI was differentiated from the subjective.

Keywords: Relationship Closeness Inventory (RCI), opposite-sex relationship, relationship closeness, subjective closeness, e-mail